石川淳論

立石伯

石川　淳論

1990年3月15日　発行　　定価 3,090円（本体 3,000円）

著　者　　立石　伯

発行者　　武内辰郎

発行所　　（株）オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16　メジャー神楽坂402
電話（03）260—0453
振替　東京 0—44705

装　幀　　ローテ・リニエ

印　刷　　（株）ケイ エム エス

落丁本・乱丁本はお取り替えします

目次

石川淳論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章　「敗荷落日」について……7
第二章　無道人について……29
第三章　死からの再生……53
第四章　方法的制覇……85
第五章　虚構の可能性……114
第六章　芸術家とその自由……148
第七章　物語の神話性……179
第八章　ノートの意味……211
第九章　魔法の杖……228
あとがき……266

石川淳論

第一章「敗荷落日」について

夷齋・石川淳の死は突然であった。八十八歳喜寿にしてなお若々しい精神を保った第一等の詩文の家が肺癌という奇怪な禍いにあってそのペンを折った。一九八七年十二月二十九日のことである。その前年、夷齋先生は死について次のごとく記している。

「老人はかならずしも死をおそれない。來るかとおもつて待つてゐても、死はさうかといつてすぐに來てはくれない。そのまへに手續がある。無常の觀念を杖について、ひとり老の坂を越えなくてはならない。いかにしてこのひとり旅をたのしくすごすか。思慮才覺もおよばず、自然の成行にまかせるほかない。」(「養老」)

こういう文章をよむとそぞろに哀しい。これを達觀とみなすか。惜しむべし、一つの「手續」かもしれぬ病魔を肉体に受入れて、魂は「無常の觀念を杖について」「ひとり旅をたのしくすごす」ことをも放擲してしまったようだ。無常の觀念という便利な考えは氏のどこにすまっていたのだろうか。氏においては、ペンとともに考える精神の努力のほかに思慮才覚はあるまい

から、自然の成行とは八十七歳の詩人の一つの遙かな夢であったのかもしれない。この夢を生活するとは、老いていく肉体を自然として飼いならしつつペンに力を集中することにほかならない。思慮才覚のおよばない自然の成行とはこうしたペンの運動の別名にほかならぬ。とまれ、一九六三年、六十四歳から『荒魂』『至福千年』『狂風記』『六道遊行』『天門』と高度な精神のたたかいを示す驚くべき長篇小説を創りだしつづけて、一九八七年一月（発表は前年の十二月にあたる）から『蛇の歌』という新たな世界の闇に直面しはじめたのである。そして、ひとたび開始されたこのたたかいが何処まで続くかと刮目している最中に、いずこの宙の中にかこの高い志をもった魂が消えてしまったのである。

ところで、死の四年前には次のような文章がある。

「ars とはわざをいふか。わざは變りながらつづいてゆくが、人間は變りやうもなく死んでゆく。そのやうにきこえる。一代かぎり、人間といつしよに、わざも一度は死ぬが、そのわざに後世の發明が活を入れて、これがまたおほきに生きのびるか。死んだ人間はそれつきり。他のたれかが死ぬのではなくて、當人のおのれが死ぬ。いのちはみじかし。これは譬ではない。」（「いのちはみじかし」）

石川淳は八十八歳にしてなお〈いのちはみじかし〉としみじみと感じさせる類の作家らしい作家であった。いうまでもなく、『蛇の歌』は連載十六回三百十五枚で絶筆・未完となった。文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

字通り、譬ではなく、氏の肉体に起きた事件である。この事件で、『蛇の歌』という若々しい恋の歌、愛の物語が中絶してしまったのである。氏の〈わざ〉は冴えわたっていた。刮目して待った所以である。ところで、氏はわざが変るという。楽観というべきか。わざは後世になるにつれ衰退するかもしれないという悲観もあろうし、見渡してみるに、「後世の發明」は、当今、心もとないかぎりである。

嘆きはつきぬが、嘆いてもはじまらぬ。ここで遅ればせの追悼をなすつもりもない。ここではまず、石川淳の精神のたたかいがどれほど熾烈なものであったか、一つの文章を味わうことからはじめたい。氏の死に関する言説によって連れだされた一つの苛酷と呼ぶにふさわしい精神世界である。

石川淳に「敗荷落日」（昭和三十四年）という永井荷風追悼の文章がある。荷風論として、追悼の文章の範としてつとに名高い。そこに示されている慧眼と苛烈な作家精神のありように於て戦慄すべき文章だということができる。氏のエッセイのうちでも特筆するにあたいする一篇である。私事にわたることを寛恕してもらえば、三十年ほど前、私が石川淳という作家の存在を脳裡にはっきりと刻みこんだのはこの文章に於てである。『紫苑物語』と『修羅』とともに、私の脆弱な精神を見舞った荒々しい精神的事件とよぶにふさわしい一つの覚醒なのであった。

十七歳の私の、文章や作家についてのぼんやりした考えをどやしつけ、くつがえす強靱な力をひめた一種の閃光体にほかならなかったからである。それは苛烈な目つぶしであった。きびしいからこそ、この文章は人の精神を震撼させると同時に、豊かな光と力にみちたものであった。次のごとき瞠目すべきことばでこの文章ははじまる。

「一箇の老人が死んだ。通念上の詩人らしくもなく、小説家らしくもなく、一般に藝術的らしいと錯覺されるやうなすべての雰圍氣を絕ちきつたところに、老人はただひとり、身邊に書きちらしの反故もとどめず、さういつても貯金通帳をこの世の一大事とにぎりしめて、深夜の古疊の上に血を吐いて死んでゐたといふ。(中略)

おもへば、葛飾土產までの荷風散人であつた。戰後はただこの一篇、さすがに風雅なほ亡びず、高興もつともよろこぶべし。しかし、それ以後は……何といはう、どうもいけない。荷風の生活の實狀については、わたしはうはさばなしのほかにはなにも知らないが、その書くものはときに目にふれる。いや、そのまれに書くところの文章はわたしの目をそむけさせた。(中略)荷風さんほどのひとが、いかに老いたとはいへ、まだ八十歳にも手のとどかぬうちに、どうすればかうまで力おとろへたのか。わたしは年少のむかし好んで荷風文學を讀んだおぼえがあるので、その晩年の衰退をののしるにしのびない。すくなくとも、詩人の死の直後にそのキズをとがめることはわたしの趣味でない。それにも係らず、わたしの口ぶりは

おのづから苛烈のはうにかたむく。といふのは、晩年の荷風に於て、わたしの目を打つものは、肉體の衰弱ではなくて、精神の脱落だからである。」

追悼の文章としておそるべき発語である。俗評を尻目にして高度な認識が語られているにもかかわらず、肩肘をはりむやみに叱咤する一片の不快な印象を残さない。平生の文学と精神についての考えを荷風の死にあたってやむなく語りだした趣きにみえる。氏は風雅の人、荷風散人の戦後の文業をとらえて、「目をそむける」、「無意味」、「ののしる」、「とがめる」、「精神の脱落」、「小市民の痴愚」などという酷評をあえてかきとめている。たしかに批評は「苛烈のはうにかたむ」いている。批判というべきかもしれぬ。「一箇の老人が死んだ」ではじまる文章の運びが「わたしの趣味でない」と進むのも首肯できる。だが、永井荷風と石川淳の文学的血縁を知る人の耳目をそばだたせる文章にはちがいない。荷風とその文学に親炙する人にとっては殊更であろう。たとえば、牧野信一の追悼文で言及された死者への礼儀というものがある。彼の死の原因を詮索しつつ「蕪雑のことばをつらねるのは、遙かに地上から牧野氏に對してはたさねばならぬ約束のごとく感ぜられる死者と生者との禮儀に出づるにほかならない。この上の禮儀はさらにひるがへつて殘された作品を吟味すること」という礼儀が欠けているとさえみえるかもしれない。牧野信一と永井荷風とに対する氏の距離を云々してもはじまらぬ。氏はいうべきこと、書くべきことを留保して、たとえ追悼文の礼儀を欠くようにみえても、ペン

を曲げる作家ではあるまい。ペンをたわめざるをえないとすれば、氏は書くことを放棄する性質の作家である。戦争のはじまりの頃、発売禁止となった『マルスの歌』以来、いやもっと若くから、文章に対する潔癖は作家のうちにあっても屈指の人だったということができる。批評しようとする作家がいかに声名高く、また自らの文学的志向と近いと考えられていたとしても、氏は自らの精神と刻々に交渉する場に於てしか対象を語ろうとしないのは自明の理である。いうまでもなく、「死者と生者との禮儀」、「作品を吟味する」礼儀は、荷風批判に於て、十分わきまえられている。では、なぜにかくまで厳しい鞭を荷風に対してふるったのであろうか。

昭和三十四年（一九五九）は石川淳還暦の年にあたる。自らの老年を自覚するには……氏の口吻をろうすれば、おそらく三秒あれば事足りる。荷風散人の老年の仕事をつまびらかにすることによって、自らをいましめる鞭を自らの仕事にふるったとみなすのは俗眼の曇りでしかあるまい。とはいっても、老年期にさしかかって、今後の仕事をどの方向に集中すべきか考えなかったはずがない。『文學大概』の中からその理論の核心を抽出して論理づけてもどこか空疎にひびくはずである。また、冒頭に引用した「養老」のような考えが底流していたとも思えない。おそらく、闇にかくされた作業として、乗りだすべき方向づけは検討されたに違いない。

ここで私にとって、氏の小説として、前々から不思議で、気にかかっていた『雅歌』（昭和二十一年）に立ちどまってみたい。「時勢おくれの末路、ただあはれむべく、それに寄る年波

で、打見にはもうなにもかもあきらめてゐるかのやうなけしき」、あるいはまた「今はやうやく老いようとして、やがて肉體のおとろへを防ぎがたくもならうとするとき」などという作中人物の自己認識がかたられている。この年、氏は四十七歳である。敗戦後の混沌たる精神と世界の中で『燒跡のイエス』や『かよひ小町』といった名品を創りだした年にほかならぬ。とはいえ、『雅歌』は自伝的要素や回想的においが濃厚な作品のごとくに読める。『森鷗外』を例にひくまでもなく、氏は肉親に対する思いの濃厚な作品を好む人ではない。自伝的要素という言葉も嫌っていたはずである。「餘人にあらず、かくいふそれがし」を私小説的に解して、素朴に作者と主人公を等価的に置きなどしないにしても、随筆を読むときに感じるような書く人の考え方が直截的に、ひしひしと伝わってくるような文章である。論の運びを単純化するために、右の事情を次のように捉えておきたい。氏がわずか四十七歳にして老年を自覚しなければならなかったとすれば、若さの意味を深く肉体に於て捉えかえすこと、つまりどこかで「永遠の青春を燃え立たせる」道とつながりをもたせることであり、それを〈自然の成行〉と化すような精神の営みをつづける意志にほかならなかったのである。

石川淳は壮年期に於て老年を、老年に於て青春を考えた。作品を挙げて傍証するまでもない。考えるということは、それらの精華が作品世界に発光すること以外のなにものでもない。だからこそ、自己と世界に対してたたかう青春と縁の切れた荷風散人の「精神の脱落」をきびしく

とがめたのである。人が老いることは肉体の自然である。肉体と精神の自然とはある位相の差異が見られる。作家は小説を書くことによって小説とは何かと考えるだろう。したがって、〈わざ〉は後世ばかりでなく、当人も常に発明するよう促されている。精神のたたかいと運動にほかならぬ。老年に於て青春を燃焼させることは、「小説家荷風に於て晩年またあらたなる運動のはじまるべきこと」以外のなんであろうか。作家の精神は力の持続によって作品のうちに刻みつけられるのであり、精神が生々と働く創造の場にはおのずから風雅がさかえることになるだろう。つまり、「高興もつともよろこぶ」べき作品が顕現することになるのである。ところで、晩年あらたな運動を荷風に期待したのは、『葛飾土産』に荷風文学の骨法を見たのであり、また氏が、戦争前の荷風の沈潜のうちによろこぶべき詩人のすぐれた文業を見たからでもある。「敗荷落日」の批判のきびしさをよく認識するためには、戦前の荷風の作品と生活をどのように吟味したのか知らねばならぬ。荷風偏奇館先生にかつてささげられたオマージュを読んでおきたい。

「さて、九死一生の思ひでどうやら夢想の生活圖形を實現するに近きをえて、これからといふときに、ほつと氣がゆるんで、自分を坊主化してしまはなかつた作者が何人ゐるか。そこから出發して、精神の運動が文學上の仕事を打出したやうな作者がまた何人ゐるか。その仕事をもつてよく小説の場に新發明を提出したやうな作者がまたさらに何人ゐるか。ただ一人、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c